
空っぽのビン

ひゐらぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空っぽのビン

【Nコード】

N4348X

【作者名】

ひぬらぎ

【あらすじ】

何にも入っていないガラスの小瓶。その中に吸い込まれた少年ユウ君。ビンの中には知らない世界が広がっていました。

01:空っぽのビン

空っぽの、小さなビンがありました。

透明なガラスで出来ていましたから、中に何も入っていないと一目でわかります。

でも、ユウくんは中に何かがある気がしてなりません。いろいろなところからビンを観察します。横から底から上から、まじまじと見ます。

けれどもやっぱり何もありません。振ってみても逆さまにしても、何も出てきません。中を覗いて見ても、やっぱり空っぽです。

それでもユウくんは信じませんでした。何もないけど、何かある。それはきつとよく見ないとわからないものだと思ったユウくんは、ビンの中をじつと覗き見ました。中に入れたら、もつとよく見えるのに、と考えながら。

そう考えた次の瞬間でした。なんと、ユウくんは考えたようにビンの中へ入ってしまったのです。ビンの口に吸い込まれたと思ったら、中にダイブしていました。

どうしてできたのか、どうしてそうなったのか、さっぱりわかりません。でも、ビンの中に入ってしまったのは確かです。

02:ビンの中

ビンの中に入り、ユウくんは底に着地しました。そして中を見渡しますが、中にはやっぱり何もありませんでした。ジャムもハチミツもパスタもありません。ゴミすらありません。

ガラス越しにはビンの外が見えます。くにやりと曲がった世界です。ユウくんはそれがおもしろおかしくてしばらく見ていましたが、やがて飽きてしまって、ビンの底にぺたりと座り込んでしまいました。

そうして上を見上げると、ユウくんは大変なことに気が付きました。

ビンの口が　つまりユウくんが通ってきたところですが　それはそれは高い場所にあったのです。背伸びしても、ジャンプしても、どうやっても、とどきません。

これでは外に出ることができません。ユウくんはどうしたらいいかわからず、途方にくれて呆然とその入り口を見上げました。

するとどうでしょう、ビンの口がもっと高くへと底から離れていくではありませんか。ビンの口はずっと高くに行ってしまう、星のように小さくなってしまいました。

そこから青色が広がり、天を覆って空ができました。同時にユウ君の足元から地面が広がり、床を覆い、そして草や木が生えてきました。

しばらくもしないうちに、からっぽだったビンの中に高い高い空と広い広い地上ができました。

どうしてでしょうか、ユウ君には、何故こうなったのか理由がわかりませんでした。でも、ビンの中は何だか楽しそうです。ビンから出る方法もわからないので、ユウ君は少し散歩してみようと、歩き始めました。

03：当たり前のこと

しばらく歩いて行くと、小さな畑が見えてきました。中では、一人の農夫が鍬を振るっています。

なんだかとてもいい匂いのする畑です。一体何を育てているのでしょうか。畑の茶色い土からは、沢山の小さな黄緑の芽がぴょんと頭を出して整列しています。でも、ユウ君にはこれが何の植物かという疑問よりも、もっと気になることがありましたから、そのことを農夫に聞いて見ました。

農夫は、まだ芽の出ない土を耕していました。ユウ君は声をかけます。

「ねえ、どうしてここはビンの中なのに、空と土があつたり、植物が生えてたり、あなたみたいに人がいるの？」

ユウ君の質問に、農夫は首を傾げました。でもすぐに、

「君はどうしてここにいるの？」

「ビンの外から、中に入つて来たからだよ」

「ビンの外は、どんな風になつていいるんだい？」

「お日様とお月様が順番に空にやってきて、忙しい人とのんびりしている人と動物いて、植物があつて、空気がおいしかったりまずかったりするよ」

「じゃあ、どうしてお日様とお月様が順番に空にあるんだい？ どうして忙しい人とのんびりしている人がいるんだい？ 空気はどうしてどこにでもあつて、おいしかったりまずかったりするのか、わかるかい？」

ユウ君は首を傾げて考えましたが、こう答えました。

「わかんない」

「そうだろう。君の質問も、そういうことなのさ」

農夫はそう言つと、再び畑を耕し始めました。

「当たり前のこと程、理由がわからないし、皆考えようとしな
いのさ。だって当たり前なんだから」

04：森の中へ

それからユウ君は、のどかな草原を気が向くままに歩いていました。

道はありません。足下は全て緑の草に覆われています。ユウ君はその草を踏みしめて、自分の足跡を残しながら、またそれを楽しみながら進みました。

やがて景色の端に、ブロッコリーのようなものが映りこんできました。

森です。青々とした大きな葉を沢山つけた木々です。

そしてその森の手前で、一人の少年が長い枝で、地面に絵を描いていました。

ユウ君は、その自分よりも幼い少年に声をかけました。

「何をしているの？」

「お絵描きしているの。キミは、森の中へいくの？」

ユウ君は森へ進もうか、迷いました。

すると少年が言いました。

「森の中はね、きつと、楽しいよ。面白いもの、新しいものが、いっぱいあるはずだから」

「キミは森の中に入ったことがあるの？」

「ないよ。でも、森の中に入ってみたとは思ってる。けどね、怖いから入れないの。だって森の中には見たことがないものがあるんだから。僕は森の中に入りたいと思ってるけどね、その勇気がなくて、だからここでお絵描きしてるの……」

ユウ君は森の中を見つめました。森の中は楽しそうです。きっと何かがあるに違いありません。でも、木々に生い茂る大きな葉のせいで、中は暗いです。

それでもユウ君は森の中へ進んでいきました。森の中は暗くて怖いけれど、それと同じくらいに楽しい事があると思ったからです。

05：歌う鳥達

森の中は薄暗く、けれども入ってしまったば怖いこと何てありませんでした。遠くで動物の鳴き声が聞こえますし、風が吹けば木々の葉が揺れて、それに伴って地面に落ちる日光も揺れます。でも、動物の姿は全くありません。鳴き声をするのは確かなのですが、他に物音はしません。聞こえるのは鳴き声と風の音、葉っぱのこすれあう音、自分が草を踏む音だけです。

しかし、よく耳を澄ますと歌が聞こえます。変な歌を、数人が歌っているようです。

かさかさ葉っぱ 見え隠れ
恥ずかしがり屋も風には負ける
かさかさ葉っぱ シャイ葉っぱ
冷たい風に押し吹かれ
葉っぱ かちかち まっかっか

その声は真上から聞こえました。だからユウ君が上を見上げるとそこには数匹の茶色い小鳥がいました。どうやら歌っていたのはこの小鳥達のようにです。

「キミ達は喋れるんだね」

ユウ君は驚きました。鳥が人と同じ言葉を話しているのが信じら

れなかったのです。

すると小鳥の一匹が答えました。

「私達はいつもこうして歌っていたわ。他の鳥達だって、こういう風に歌っているじゃないの。そうでしょう？ 珍しいことじゃないでしょう？」

「僕の知っている鳥は、キミみたいに話さないよ？ ぴっぴって、鳴くよ」

「あら！ あらあら！ ということは、キミ、いままで損しているわよ！」

小鳥達は笑い出しました。

「鳥の声がそう聞こえたってことは、いままでキミは私達が何を話しているのか聞こうとしなかったからよ！ 言葉を持っているのは人間だけじゃないんだから。動物だってお話するわ。可愛そうに、いままで鳥の歌なんて聞いたことがなかったのね、面白い話が沢山あるのに」

「でも、鳥とおしゃべりしたって人、僕知らないよ。鳥はぴっぴって鳴くって、みんな言うよ？」

「じゃあ、キミの住んでいるところではそれが常識なのね……それじゃあ仕方がないわね。常識は世界のルールだもの」

と、小鳥達は笑うのをやめて、哀れむようにユウ君を見下ろしました。しかしすぐに笑って、

「ここではありとあらゆるものがおしゃべりするわ。それがこの『当たり前』だから」

「そうなんだ。じゃあ、キミ達の乗っている木もおしゃべりするの

「？」

「するわよ。でも、もともと木は無口だし、キミはおしゃべりに慣れていないみたいだから、きっとお話できないわね」

それを聞いてユウ君はがっかりしました。でも、他の動物とならお話できるかとも思い、小鳥達と別れて森の中を進みました。

06：虫を食べる花

木の根元に、大きな花が一つ咲いていました。ラッパのように綺麗に咲いた花です。色は鮮やかな赤色で、暗い森の中では浮いていました。とてもいいにおいがします。食べたらきつと、ハチミツみたいに甘いのかな、とユウ君は思いました。

近寄ってユウ君は花の中を覗きます。花の中はずっと奥まで続いているかのように深いです。ずっと奥は、真っ暗です。覗き込んですぐに飛び込んでみたいと思ったユウくんでしたが、その奥の暗闇を見て怖くなり、花から離れました。

と、一匹のミツバチが森の奥から飛んできました。この花の甘い香りに誘われたのでしようそのミツバチは、匂いのもとを確認するかのように大きな花の周りを飛び、そしてミツバチは花の中へ、ミツを取りに入っていました。

その瞬間、ラッパのように開いていた花がぱくりと閉じてしまいました。花の中で、焦ったミツバチがぶんぶんと暴れる音が聞こえます。でも、すぐに聞こえなくなっていました。

食虫植物だ、とユウ君は気付きました。虫を食べてしまう花です。

「ああ、恐ろしい！」

ユウ君の背後で、そんな悲鳴が聞こえました。振り返ると、草むらに生えていた小さなたんぽぽが震えていました。

「虫を食べる花だなんて、なんて恐ろしいんでしょう！」

「キミは、食虫植物を知らないの？」

「食虫植物ですって？」

たんぽぽはさらに震えました。

「そんなもの、知らないわ！　ありえないもの！」

07：花を食べる花

「キミは花なのに、同じ花のことを知らないんだね」

ユウ君は小さなたんぽぽに言いました。するとたんぽぽは叫びました。

「あんなの、私と同じ花なんかじゃないわ！ 第一、同じ花だったとしても、同じ花だからといって他の花のことがわかるわけないじゃない」

「でも、花の仲間同士でしょう？」

「じゃああなたは同じ人間同士なら、誰でも分かるわけ？」

「それは……わかんないや」

と、ユウ君とたんぽぽが話していると森の奥からかさかさと、草をわけてこちらにやってくる、なにかの足音が聞こえてきました。するとたんぽぽは頭を草の中に隠してしまいました。

「どうしたの？」

突然のことに驚いたユウ君は屈んでたんぽぽに声をかけますが、たんぽぽは死んでしまったかのようにぴくりとも動きません。

「大丈夫？ おなか痛いのか？」

ユウ君は心配してたんぽぽに何度も声をかけます。でもたんぽぽは全く反応しません。

そうしているうちに、森の奥から草を掻き分けてやってきたそれ

が姿を現しました。それは一つの大きな紫色の花。でも、ただの花ではありませんでした。その花の根っこは人の足のように動き、花びらには小さな牙が付いていました。紫の花は周囲を見回し、そばで震えている小さな花をみつけると、それを頭から覆いかぶさるようにして自分の花びらで包みました。

花が、花を、ぱくりと食べてしまったのです。

紫の花は、それで満足したのか、また、森の奥へと帰っていきました。

隠れていたたんぽぽがもとのようにすくつと立ちます。

「ああ、びつくりした」

たんぽぽはびくりと震えました。ユウ君はもっと震えていました。

「あの花、別の花を食べたよ！ あんなの、花じゃない！」

するとたんぽぽは冷静に答えます。

「でも、あれも花よ。あなた、花を食べる花を知らないのね」

「そんなの知らないよ！ 第一、共食いだよ！ 恐ろしいよ！」

たんぽぽは首を傾げました。

「あら？ 人間だって、共食いするじゃないの？」

「そんな恐ろしいことしないよ！」

ユウ君は、思わず怒鳴ってしまいました。

08：一本のライフル

進んでいくうちに、森の中はますます暗くなっていきました。肌寒くもなってきました。それでもユウ君は先に進みます。でも、歩くスピードは先よりも遅くなっています。ユウ君は疲れているのです。

どこかで休もうと思いました。でも、焚き火をできるような場所も、火をつけるマッチも持っていないせん。

そんなところで、ユウ君は森の開けた場所に出ました。火はないけれど、ここで休める、とユウ君は安心しました。

でも、その開けた場所の中央に、長くて細い何かが刺さっています。暗くてそれがなんなのか、わかりません。恐る恐る近づいてみると、それは、古びたライフルでした。長い蔦が這っている様子から、ずつつと昔からここに刺さっているのでしょう。

それよりも、ユウ君はライフルの根元にあるものに喜びました。そこにはマッチがあつたのです。

ユウ君はすぐにそのマッチを拾いました。そして近くから適当に枝や葉っぱを集めてきて、それに火をつけました。焚き火ができる、と、だんだんと身体が温かくなってきました。

「……ねえ」

焚き火に当たっていると、不意に声がしました。

ライフルでした。

「君、旅をしているの？」

「違うよ。散歩しているだけ」

ユウ君がそう答えると、ライフルは黙ってしまいました。でも、しばらくして、

「君、街へ行くの？」

ライフルはそう、ユウ君に聞いてきました。でも、ユウ君の散歩の予定は未定です。

「わかんない」

「そう……」

するとライフルはがっかりした様子で返事をしました。今度はユウ君がライフルに聞きます。

「キミは、街に行きたいの」

「うん」

「どうして？」

「生まれ変わりたいんだ」

さすがのユウ君も、首を傾げました。

09：優しいライフル

「僕、人を殺すために生まれてきたの」

ライフルは唐突に言いました。

「この森が戦場になったときも、僕は沢山人を撃ったよ。でも僕が殺したくて人を沢山殺したわけじゃないの。僕を使っていた人が、他の人を殺したくて、それで僕を使って人を殺していたの。でも僕、人を殺すのは嫌だったんだ。そう僕を使っている人にいったら、『ライフルのくせに生意気だ』って言われちゃった。『ライフルは殺す道具として存在しているんだ』って、言われちゃったの……」

「キミは、人を殺すの？」

「そう。そのための道具なの。でもそれは僕のせいじゃない。僕は僕が嫌だ。だから僕、生まれ変わりたいの。こんな人を殺す道具なんかじゃなくて、もっといい道具、人と人をつなぐ道具に……そう、お手紙を留めておくような文鎮がいい」

ユウ君はこくこくと頷きました。でも、幼いユウ君には、このライフルが何を言っているのか、半分ほどしか分かりませんでした。ただ、さなぎが蝶々になるみたいに、このライフルも変身するのだということとはわかりました。そのためにライフルは街に行きたいということも分かりました。

ユウ君は、地面に刺さったライフルを引き抜きました。

「じゃあ、街につれてってあげるよ」

そうしてユウ君はライフルを背負いました。ライフルは嬉しそう

に、

「本当？」

「うん。だってキミ、ここで僕がこうしないと、変身できないんだよ？」

そうして、ユウ君はライフルと一緒に散歩することになりました。

10：化粧する豚

朝になりました。

ユウ君はライフルを背負って、再び森の中を進み始めました。森の中は、昨日となんら変わりありません。

しかしそんな森の中で、一軒の小さな家が建っているのをユウ君は発見しました。赤い屋根に白い壁の、可愛い家です。小さな庭もあり、また可愛い花が咲いています。

ユウ君はその家のドアの前に来ると、ドアをノックしました。

コンコンコン。

三回ノックしました。それからしばらく待ちます。しかし、家中から誰かが出てくる気配はありません。

コンコンコン。

再び三回ノックしました。それから、

「誰かいますか？」

と、声をあげましたが、やっぱり家の中から誰かが出てくる気配はありません。

そこでユウ君は、ドアノブに手をかけました。鍵はかかっていませんでした。ドアはあっさりと開き、ユウ君は恐る恐る中に入りま

した。

「入りますよ」

するとそこでは、一匹のピンクの豚がドレッサーの前に座って化粧をしていました。

「ごめんなさいね、いま、お化粧するのに忙しいの」

豚は鏡を見たままです。ユウ君を見ようとはしません。自分の顔におしろいをべたべたと塗りつけ、真っ赤な口紅もぐりぐりと塗り、また頬紅もべちゃべちゃに塗ったくっっています。

「あら、素敵だわ!」

豚は鏡の中の自分を見て満足していますが、ユウ君は気分が悪くなつてすぐに家を出ました。化粧した豚の顔は、恐ろしく不気味だったからです。

「あれが素敵なんだって」

ユウ君は背中の中のライフルに語りかけます。

「あれ、怖いね」

「そうだね。あの豚は自分のことが素敵だと思って、実際はどうなのかわかっていないんだよ」

ライフルもそう言いました。

11：森を泳ぐ魚

森の奥をゆつくりと動く、黒い影が木々の向こうで見えました。

ユウ君はその影を見たたん、びつくりして「ぎゃあ！」と声を上げて尻餅をついてしまいました。するとその影は動きを止めて、ユウ君の方へ向かってくるではありませんか。

怯えたユウ君は背中の中のライフルを取り、銃口をこちらへ来る影に向けました。

「引き金を引かないでね。弾は一発入っているけど、僕、使われるの、いやだよ？」

ライフルがそう言います。だからユウ君はライフルの引き金に手をつけず、銃身を両手で握って持ちました。

黒くて大きな影は徐々に近づいてきます。そしてそれは、木々の間から姿を現しました。

それは大きな魚でした。

大きな黒い目は森の奥を見つめていて、鱗は日光に照らされて七色に輝いています。ひれはふわふわと揺れています。大きな魚は、まるで水の中を泳ぐように宙を気持ちよさそうに泳いでいました。

尻餅をついていたユウ君は、そのガラスでできたような魚をあっけに取られて見つめていました。

魚の黒目が、ぎょろりとユウ君を捕えます。その瞬間、揺れた魚の瞳には虹色の光が輝きました。

魚がユウ君を見つめたのは、ほんの数秒のことでした。魚は元のようには森の奥を見つめると、そちらへと泳いでいきました。

12：小さなお店

やがて、ユウ君は森を抜けました。森の向こうに待っていたのは、いくつものガラクタの山が続く道でした。

でもその道に進む前に、森のすぐそばにあった小さなお店で休むことにしました。

中に入ると、そこはとてもかわいらしいお店でした。コーヒーのいいにおいが漂っています。テーブルは三つだけあり、一つのテーブルにはすでにウサギが座っていて、新聞を読みながらコーヒーを飲んでいました。

「やあ、いらつしやい」

店主のおじさんはこころよく迎えてくれました。けれど、ユウ君はお金を持っていません。

「こんにちは。あの、お水を一杯もらえませんか？ お金持っていないです」

すると店主のおじさんはライフルを見ながらいいました。

「お水なんかでいいのかい？ ジュースや紅茶もあるよ？」

「でも、お金持っていないです」

「お金なんていらないよ。好きな物を、好きなだけどうぞ」

そうして幸運なことにユウ君は無料で食事することになりました。

どうして店主のおじさんが「お金はいらない」と言ったのか、ユウ君には分かりませんでした

13：紅茶の中のカエル

ユウ君は店主のおじさんに、紅茶をお願いしました。

店主はすぐに紅茶を持ってきました。深くい匂いのする、綺麗な色をした紅茶でした。夕日のような色をしています。しかしユウ君は、その運ばれてきた紅茶に手をつけませんでした。熱いものが苦手なのです。

しばらくしてから、ユウ君は白い陶器のシュガーポットから砂糖をスプーン二杯分をすくって紅茶の中へ入れました。そして紅茶を混ぜようとしたが、その手が止まってしまいました。

紅茶の紅い水面には、小さなカエルが映っていました。カエルはこちらを見上げ、頬を膨らましました。

ユウ君はびっくりです。

「どうしてキミはそんなところにいるの？」

紅茶の中にいるというよりも、熱い中にカエルがいることに驚きました。ユウ君の知っているカエルは、涼しい水辺にいるものからです。

「やろうと思えばできるんだよ」

カエルは言いました。

「これは思い込みなんかじゃない。やれば本当にできることだって

あるのさ」

そしてカエルはカップの奥のほうへと泳いでいきました。

慌てたユウ君は思わず立ち上がってカップの中を覗き込みました。

でも、もうカエルの姿は映っていませんでした。

14：ガラクタの山

紅茶を飲み終え、ユウ君は小さなお店を出ました。そして、ガラクタの山がいくつもある道へと進みます。

ガラクタの山は、まるで森の木々のようにいくつもあります。大きさも様々。数個のガラクタが積み重なった山や、数えきれないほどのガラクタが積み重なった巨大な山と、沢山あります。

ガラクタにも様々なものがあります。クマの人形やティーカップ、テレビや車、果てには、背負ったライフルに似たものまであります。しかしどれも汚く汚れていて、鮮やかではありません。空を見上げれば、空も鮮やかではありませんでした。鉛色をしています。

ユウ君はなんだか悲しくなりました。

しかし、少し大きなガラクタの山に綺麗な小箱が埋まっていることに気が付くと、目を輝かせました。その小箱だけ、鮮やかだったのです。

宝箱かもしれない、と、ユウ君はそのガラクタの山に駆け寄って、綺麗な小箱を引き抜きました。するとガラクタの山はいくらかくずれましたが、ユウ君は気に留めません。小箱を地面に置くと、ふたを開けました。

するとどうでしょう。小箱の中から、ピエロの首が高笑いしながら飛び出して来ました。

ユウ君はびっくりです。声を上げて小箱　びっくり箱から離れ

ます。背中ではライフルが笑っています。

「こんな悲しい場所でも、面白いものはあるんだね」

ユウ君は飛び出したピエロの首を中に押し入れふたをすると、小箱をもとあつたガラクタの山の中に押し込みました。

「ここに来た人が、この箱を見つけて開けたら、きっとびっくりして笑っちゃうんだろうね」

ユウ君は笑いました。

15：捨てられた人形

ガラクタの中には、ぼろぼろになった人形の姿もありました。どれも薄汚れていて、手足が千切れていたりして中の詰め綿が出てしまっています。

ユウ君はこの人形達がかawaiiそうだな、と思いました。でも人形達は何も喋ろうとしません。

死んでいる訳ではなさそうです。その証拠に、ボタンやビーズの目は輝いています。彼らはまだ、生きているのです。

しかしおしゃべりしている人形も、泣いている人形もいません。

そこでユウ君は、近くにあったウサギの人形を手に取りました。方耳の根元がちぎれ、そこから綿が飛び出した、汚れたウサギの人形です。ユウ君はそのウサギの人形を軽く叩いて埃を払うと聞いてみました。

「キミは、どうしてここにいるの？」

するとウサギの人形は顔を上げました。ちぎれた方耳が揺れます。

「捨てられたんだよ」

ウサギは淡々と答えました。だからユウ君はまた聞きます。

「こんなところに捨てられて、悲しくないの？ 寂しくないの？」

ウサギの人形は答えました。

「悲しくないし、寂しくないよ。僕たち人形はもともそういう物であるし、僕たちは沢山遊んでもらって愛されたから。こんなところに捨てられてもね、遊んでもらって愛された日々を思い出せば、悲しくないし、寂しくないんだよ」

ユウ君はウサギの人形を元の場所に座らせました。思い出に浸る邪魔をしてはいけないと思ったからです。

そうして先を行こうとしたユウ君に、ウサギは言いました。

「もし僕らの事をかわいそうだと思うのなら、その気持ちはこの先を行ったところにいる人たちにあげて。彼らのほうが、ずっとかわいそうだから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4348x/>

空っぽのビン

2011年11月13日03時49分発行